

## 祖堂集卷第二

卷内に於いて西天並びに震旦の一十七祖已り畢る

第十七祖僧伽難提尊者、羅伐城の人なり。刹利姓にして、父の名は宝莊嚴、母の名は芬陁利なり。纔かに生るるや解く語り、分明曉了にして母の為に説法せり。既に羅睺羅の法を得て、行化して摩竭国に至り、一童子の年は十二に当り、手に銅鏡を執りて師の所に来たるを見る。師問うて曰く、子は年は幾ばくぞや。子曰く、我れは百歳に当る。師曰く、汝は当に無智なるべし。汝を看るに幼少なり。答えて我れは年は百歳なりと曰うは、其の理に非ざるなり。子曰く、我れは理を会せざるも正に百歳に当れり。師曰く、子は機に善きなり。子曰く、仏の偈に云く、若し人生れて百歳にして、諸仏の機を会せずんば、未だ若かず生れて一日にして、而も之を決了することを得しには、と。時に尊者は之を敬い、深く是れ聖なることを知れり。問うて曰く、汝、此の鏡を執る、其の意云何ん。子曰く、諸仏の大円鏡は、内外に瑕翳無し。兩人同に見ることを得て、心眼皆な相似す。其の舎の父母、子の言の異なるを見ても則ち出家せしむ。師は度脱を為し、領して古寺に詣り、而して受戒を為さしめ、名づけて伽耶舎多と曰う。

彼の殿角に一銅鈴有り、風の揺響するを被る。師曰く、彼の風鳴るや。銅鈴鳴るや、子曰く、我が心鳴るか、風と銅鈴とは非ず。師曰く、風と銅鈴とは非ず、我が心は誰なりや。子曰く、俱に寂靜なるが故に、豈に三昧に非ずや。師曰く、善い哉、眞の比丘、善く諸仏の理を会し、善く眞の法要を説き、善く諸仏の義を識る。乃ち命じて付法し、偈を以て告げて曰く、心地は本と無生にして、種に因りて縁より起る。縁と種と相い妨げず、花と菓とも亦復然り。伽耶舎多、師の偈を説くを聞き、及び法蔵を受けて心に敬重を生じ、頂戴して受持せり。師は付法し已つて即ち本座を離れ、樹下に至りて立ち、而して左手を挙げて其の樹枝を攀じ、尋いで則ち滅度せり。其の舍利を焚くに則ち樹側に在りて移動す可からざれば、則ち本処に就いて塔を豎てて供養せり。諸天散化して而も宝衣を雨らし、用て塔処に散せり。

時に此の土の漢の第七主昭帝十年辛酉の歳に当れり。淨修禪師講して曰く、僧伽難提、莊嚴の王子。城を逾ゆること九重、山に入ること千里。定は井金に喩(原作俞)え、義は終始に乖(原作班)く。理は師に屈し、忽ち自己を窮む。

第十八祖伽耶舍多尊者、麻竭国の人にして姓は鬻頭藍なり。父の名は天蓋、母の名は方聖。年、十二に至り、僧伽難提の法を得て、行化して月氏国に至りて大いに仏事を作す。一波羅門有り、名づけて鳩摩羅多と曰う。心に外道を信じて仏法を愛せず。師は波羅門の家に至りて大因縁を為説せり。又た父の病いの因縁を為説せり。時に於いて波羅門は師の所説を聞きて歡喜を生じ、出家を求めんと欲す。師は出家せしめ具足戒を受けしめ、道果を證しめたり。乃ち命じて付法し、而して偈を説いて曰く、種有り心地有り、縁に因りて能く発萌す。縁に於いて相い礙げずして、生ずるに當つて生は不生なり。時に鳩摩羅多、師の偈を説くを聞いて心に歡喜を生じ、自らの安樂に當れり。師は付法し已つて、即ち座より起ち、身を虚空に踊らせて十八變を作し、化火三昧して自ら其の身を焚けり。衆は舍利を拾い、塔を起てて供養せり。

時に此の土の前漢第十五主成帝十四年戊申の歳なり。淨修禪師讚して曰く、迦耶舍多、幼くして仏の機を会す。手に宝鏡を執りて、難提師に面す。内外は翳を絶ち、眉目は虧くる無し。風飄の鐸韻は、我れに非ずして是れ誰ぞ。

第十九祖鳩摩羅多尊者、月氏国の人なり。初め伽耶舍多に遇い、法を得て行化し、時に北天に至る。一大土有り、闇夜多と名づく。而して油を用て足に塗り、諸国を巡遊す。遙かに伽耶舍多を見て礼を作して問う、我が家の父母は心に常に供養し、亦た仏道を求むるも未だ省せず。是れ何の因縁もて長く疾苦を榮らすや。又た鄰舎を觀るに、常に凶殺を行いて修行を樂まざるに而も患つる所無し。此の二事、実に未だ之を曉らず。唯だ願わくば慈悲もて我が為に解説せよ。尊者云く、業は三世に通じ、影の形に隨つが如し。善を積めば余慶あり、惡を積めば余殃あり。聞説して歡喜し、志し出家せんことを願ひ、師の納受せんことを乞へり。既に摺受し已つて、便ち道果を獲たり。師乃ち命じて付法し、而して偈を説いて曰く、性上には本と無生、求むる人に対するが為に説く。法に於いて既に無得なれば、何ぞ法と不法とを懷わん。師は付法し已つて、座上に於いて爪を以て面を齧くき、各おの両向に分てり。此の処に當る

分に大光明有り、大衆を照らし已つて寂然として滅度せり。

時に此の土の王莽即(原作則)位十八年壬午の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、鳩摩羅多、犬(原作大)常に簷に止まる。師の訣を為すを蒙り、父を委てて黙つ無し。本と鍛鍊に非ざるも、肯えて錐鉗を藉る。一榻に孤坐して、人天礼瞻す。

・犬常止簷 宝林伝卷四伽耶舍多章参照。

第二十祖闇夜多尊者、北天竺国の人なり。鳩摩羅多の法を得已つて、行化して羅閱城に至り、一頭陁の婆修盤頭と名づくるに遇えり。六時礼仏し少欲知足、長坐不臥にして一食するのみ。余の時尊者、大衆に問うて曰く、此の頭陁なる者は汝見ること如何ん。衆曰く、不可思議なり、常に梵行を修して長坐不臥、一食するのみ。師曰く、此は是れ道なりや。衆曰く、誠に尊説の如し。師曰く、今此の頭陁は久しからずして当に墮して道と懸かに遠さかるべし。心に求むる所有るは名づけて道と為さず。衆曰く、師は如何ん。師曰く、我れは道を求めず、亦た顛倒せず。我れは六礼せず、亦た輕慢せず。我れは長坐せず、亦た懈怠せず。我れは一食せず、亦た雜食せず。我れは足るを知らず、亦た貪欲せず。

余の時頭陁は師の所説を聞きて心に歡喜を生じ、偈を説きて讚して曰く、稽首す三昧尊、仏道を求めず。礼せず亦た慢らず、心に顛倒を生ぜず。坐せず懈怠せず、但だ食して好む所無し。慢たると雖も而も遅れず、急ぐと雖も而も燥<sup>あせ</sup>らず。我れ今宝尊に遇い、和南して師教に依る。師、偈を説くを見已り、師告げて曰く、如来は正法眼を以て迦葉に付嘱し、是くの如く展転して乃ち我に至れり。我れ今、汝に嘱す。汝は善く護持して断絶せしむること勿れ。吾が偈を聴け、曰く、言下に無生に合し、法界性に同ず。若し能く是くの如く解すれば、事理に通達し竟る。

師の入滅の時、此の土の後漢第二主明帝十六年甲申の歳に当る。淨修禪師讚して曰く、闇夜多祖、格高く貞古し。錫に六環有り、田に半畝無し。言下に不生なれば、何処か普かざらん。垂手入闢す、他方此土。

第二十一祖婆修盤頭尊者、羅闍城の人にして姓は毗舍佉なり。父の名は光蓋、母の名は嚴一。師、闇夜多の法を得て、行化し那提国に至り、而して常在王と共に言論する次いで、一使者有り、乃ち王に奏して曰く、百万の象兵の南面に至れり。王曰く、此の事は少なからず、如何にしてか抵敵せん。師曰く、大王よ愁るる莫れ、第二太子摩拏羅をして輕喝一声せしめよ。大王は則ち太子に命じて喝せしむ。太子は王の教詔を奉じて即ち城南に至り、便ち左手を挙げて其の腹上を拍ち、而して喝一声せり。象兵は地に倒れて復た更に起たず。王は此の事を見て深く自ら歎訝し、師に願いて撰受せしめ、度脱して出家せしめ、聖に命じて受戒せしむ。

余の時太子、偈もて讚して曰く、百万の象を摧かんが爲に、鼓腹して神通を作せり。一切の諸宮殿、震動せざる者無し。師の方便力に遇いて、而して我れを度脱することを得たり。父母に稽首して辞し、而して愛火を出でん。余の時尊者は則ち太子を領して遊行化導し、勝法幢を建てたり。乃ち命じて付法し、而して偈を説きて曰く、泡幻は無碍に同じ、如何んが了悟せざる。法に達すれば其中に在り、今に非ず亦た古えに非ず。

師の入定の時は、此の土の後漢第五主煬帝九年丁巳の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、婆修盤頭、修行して臥せず。辛勤を歴ると雖も、翻つて懶情を成す。指に因りて月を見、歌に逢つて和を指す。泡幻に眞無ければ、慮情に過無し。

第二十二祖摩拏羅尊者、那提国の人にして姓は刹利帝、名は大力尊なり。父の名は多滿、亦た常在と名づく。具さに宝林伝の如きなり。余の時摩拏羅、鶴勒に告げて曰く、我れ今、此の正法眼蔵を將て汝に付す。汝は当に守護して断絶せしむること無かるべし。汝、吾が教えを受けよ、と。而して偈を説きて言く、心は万境に隨つて転じ、転ずる処実に能く幽なり。流れに隨つて性を認得すれば、喜も無く亦た憂も無し。

此の師の入滅の時は、此の土の後漢第九主桓帝十八年乙巳の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、塔を并じ象を降す、自在の王子。雷は蟄門に震いて、邪師は齒を失う。神運六通、道風千里。声色恒に眞なれば、何ぞ聾耳を須いん。

・心隨万境轉云 この伝法偈は臨濟録に引かれている。入矢義高氏による和訳、心は万境のままに轉變しつつ、その轉變の

しかたはなんとも秘めやか。その流れのままに心体を見て取れば、喜びも憂いも生ずることはない(岩波文庫本一 五頁)。

第二十三祖鶴勒尊者、月氏国の人にして姓は婆羅門なり。父の名は千勝、母の号は金光。具さに宝林伝の如きなり。 尔の時鶴勒、師子に告げて曰く、我れ今、此の正法眼蔵を將て用て汝に付す。汝は善く護持し、外方に行化せよ。当に国に難有りて、刑の汝が身に在るべし。汝は吾が教えを受けて而して偈を聴け、曰く、心性を認得する時、不思議と説く可し。了了として得る可き無く、得る時は知ると説かず。

此の師の滅度せる時は、後漢第十一主献帝十九年己丑の歳に当れり。淨修禅師讚して曰く、尊者鶴勒、上徳は徳ならず。性に任せて縦横し、発言奇特なり。功は二儀よりも高く、名は万国に喧し。稽首して帰依す、祖林の簷蔔。

第二十四祖師子尊者、中印度の人にして姓は婆羅門なり。具さに宝林伝の如きなり。 尔の時師子、婆舍斯多に告げて曰く、如来は正法眼を以て迦葉

に付嘱し、是くの如く展転して乃ち我れに至れり。我れ此の法を持し、僧伽梨衣を并せて汝に付嘱す。汝は当に護持して断絶せしむること無かるべし。而して偈を聴け、曰く、正に知見を説く時は、知見するは俱に是れ心なり。当心にして即ち知見す、知見するは即ち今に于いてす。

此の師の還債せし時は、此の土の前魏第三主少帝己卯の歳に当れり。淨修禅師讚して曰く、師子尊者、人天は譽れを仰ぐ。雪裏に松青く、雲間に鶴翥ぶ。論鼓纒かに声るや、法輪高く馭す。邪徒を挫拉し、眞を悟りて来去す。

第二十五祖婆舍斯多尊者、罽賓国の人にして姓は婆羅門なり。父の名は寂行、母の号は常安樂。夜、神人を夢みるに、手に宝劔を執りて常安樂に付したり。此れに因りて孕有り、月を満たして産するに、其の子は常に拳して物を執れるに似たり。此れより出家して證果得法し、行化して中天竺国に至り、広く群迷を化せり。

次第して遊行し、南印度に至る。一国王有り、名づけて得勝と曰う。常に呪師を崇め、仏法を信ぜず。呪師、王に奏すらく、婆舍

斯多は仏法を会せず。請つ王、之を試みよ。此の人聖なりと云つも其の異事を問ひ、若し答え得ざれば則ち師子繼承の弟子には非ず、と。大王に一太子有り、不如密多と名づく。則ち王に向つて曰く、今の此の尊者は、先王供養して大威徳有り。之を試みるを用いず、と。王は切齒して呵嘖し、則ち太子を囚えたり。王乃ち師に命じ、師は則ち命に赴けり。王は坐せしめずして当殿に試語せり。問うて曰く、我が国の中に諸の邪法無し。師の学する所の物は<sup>は</sup>当た是れ何宗ぞや。師曰く、此の国の内に諸の邪法無し。我が学する所の者は当に是れ仏宗なるべし。王曰く、仏滅度し已つて千二百年なり。師は今七十、当た何ぞ之を得ん、と。師曰く、釈迦伝教してより二十四人を歴たり。我が今学する所は当に師子尊者の法を継ぐべし。亦た信衣有り、僧伽梨衣と名づけ、現に囊中に在り、と。取りて大王に呈せり。王は仏法の袈裟を見ると雖も、心に敬信せず、則ち左右に命じて火を以て之を驗さしめたり。其の火は熾然として光明は天を貫けるに、祥雲の地を覆い而して四花を雨ふらせ、異香は氣馥り、火は<sup>もえ</sup>熾きて衣は存せり。王は斯の瑞を覩て方めて乃ち発心し、哀みを求めて懺悔せり。此の衣は王宮に在りて塔を起て供養せり。

時に太子は深宮に囚わるることを被り、並びに食を得ず。乃ち云く、我れ法の為の故に今此に飢渴す。如何んが存濟せん、と。其の時天の白乳を降して口に入らしむるに味は甘露の如し。食し了つて<sup>軽健</sup>原<sup>作</sup>建<sup>に</sup>して乃ち是の言を作さく、我れ若し宮を出でなば則ち便ち出家せん、と。王は詔して宮を出でて、師に投じて出家せしめたり。師云く、汝は出家せんと欲す。当<sup>は</sup>た何事を為すや。太子曰く、我の出家する所は、其の事を為さず。師曰く、汝の為さずと言は、何事を為さざるや。太子曰く、我の為さざる所は、俗事を為さざるなり。師云く、俗事を為さずして、当<sup>は</sup>た何事を為すや。太子曰く、俗事を為さずして、当に仏事を為すべし。師自ら念言すらく、如来は大悲力を以て、此の太子をして仏事を助作せしむ、と。師の左右に在りて出家具戒し、便ち道果を證せり。乃ち命じて付法し、而して偈を説いて曰く、聖人は知見を説く、境に当りて是に非ざるは無し、と。我れ今眞性を悟る、道も無く亦た理にも非ず。

此の師の入滅の時、此の土の東晋第一主元帝八年乙酉の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、婆舍斯多、久しく攀縁を離る。未だ作者に逢わざれば、終に拳を開かず。師の衣鉢を伝え、物を度す橋船。心に当りて妙見す、豈に言宣を仮らんや。

第二十六祖不如密多尊者、南印土国の太子なり。王(原作正)の名は得勝。

具さに宝林伝の如きなり。

此の時不如密多、般若多羅に告げて曰く、我れ

此の法を持して、用て汝に付す。汝は善く護持して断絶せしむること勿れ。而して吾が偈を聴け、言く、眞性は心地に蔵せられ、無頭にして亦た無尾なり。縁に応じて物を化す、方便して呼んで智と為す。

此の師の入滅の時は、此の土の東晋第九主武帝戊子の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、不如密多、勝王の誕慶。高く宮嬪より遠ざかり、廻かに道行に悖まがむ。仏法の棟梁、王臣瞻仰す。嬖妍を洞鑿す、祖堂の金鏡。

第二十七祖般若多羅尊者、東印度の人にして姓は婆羅門なり。父母俱に喪し、菩薩を示化して仏事を作せり。不如密多の法を得て、行化して南天竺国に至る。国王は刹帝利にして、香至と名づく。師因みに王の斎に赴く次いで、諸聖皆な転経するに唯だ師のみ有りて転経せず。大王、師に問う、什摩と為てか転経せざる、と。師曰く、貧道は出息は衆縁に随わず、入息は蘊界に居らず。常に是くの如き経を転すること百千万億巻にして、但だ一卷のみには非ず、と。此の時大王は師に一珠の光明燿然たるを賜えり。具さに宝林伝の如きなり。是の化なる般若多羅、達摩に告げて曰く、我れ今、此の正法眼蔵を將て用て汝に付す。而して吾が偈を聴け、曰く、心地に諸種を生ずるは、事に因り復た利に因る。果満ちて菩提円かなれば、花開きて世界起る。般若多羅、化火もて身を焚けり。

時に此の土の宋第五武帝孝建四年丁酉の歳に当れり。淨修禪師讚して曰く、般若多羅、幼名は瓔珞。父母淪亡し、東西に盤泊す。一たび亀毛を嚙りてより、恒に水の涸るるを嗟す。果満の菩提、道源遼廓たり。

第二十八祖菩提達摩和尚、南天竺国香至大王の第三太子なり。般若多羅の法を得たり。般若多羅乃ち告げて曰く、汝は今法を得たるも亦た遠く化すること莫れ。吾が滅後六十七年を待ちて、当に震旦に往きて大いに法薬を施すべし。汝速やかに去くこと勿れ、当に難の起る有りて、日下に衰つべし。達摩問うて曰く、我れ彼の国に去きて行化するに菩薩有りや。師云く、彼の国は道を獲る者は

稻麻竹葦の如くして称計す可からず。吾が滅度後六十七年、各別に人を著かん。此の国の留難は、水中に文布きて自ら善く之を降さん。汝は彼の国に至りて、南方は住まること勿れ。彼の国の天人は仏理を見ず。好みて有縁を作して功德を愛づ。汝は彼の国に至らば則ち出でて住らず。吾が讖を聴け、曰く、路行して水を跨ぎ復た羊に逢い、路行とは来なり、水を跨ぐとは海を過ぐるなり、復た羊に逢うとは洛陽なり、達摩大師は南天竺より海を過ぎて来、原作未たり、初め広州に到り、次いで普通八年丁未、原作来の艦に梁國に入 独自に怏怏として暗に江を渡る。独自には伴宿無きなり、孤舟しては苦に耐むなり、暗に江を過ぎて北魏の國に向えるなり、ず、変容して言わず、師は機を契わざることを知れば、則ち潜かに梁の國に入 日下に怜れむ可し双象馬、日下とは京

なり、怜れむ可しとは好きなり、双象馬とは志公、備大士となり、

西株の嫩桂久しく昌昌たり。

西株とは二木なり、二木は是れ林の字なり、嫩桂とは少なり、則ち少林寺なり、久しく昌昌たりとは九年面壁して出て、大いに仏法を行ひしなり、

達摩又た師に問う、此の後更に難有りや。師云く、吾が滅度後二百五年にして小難有り。吾が讖を聴け、曰く、心中は吉なりと雖

も外頭は凶、心中とは周の字なり、外頭は凶とは周王無道にして仏法を滅ぼすなり、

川下の僧房名は中らず。

川下の僧房とは俗に僧房を号して息と為す、川下の息は息の字と為すなり、後周の文帝は姓は宇文にして名は泰也、中らずとは後周沙汰して仏法を滅ぼせばなり、

毒竜に遇いしが為に武

子を生み、毒竜とは武帝の父王なり、武帝を生むとは武帝を生むなり、

忽ち小鼠に逢いて寂して窮り無し。

小鼠とは庚子なり、周の武帝は庚子に崩せり、寂して窮り無しとは唐滅して無きなり、

又た問う、此の後更に難有りや。師云く、吾が滅度後一百六年にして小難有り、父子相い連ぬ。亦た当に久しからずして、一二三

五歳を作すべし。此の事の過ぐるに当り、人有りて其の意を見るを以て、吾れは明らむる能わず。略して讖を与えて曰く、路上に忽

ち逢う深処の水、路上とは季の字なり、深水とは淵の字なり、唐の高祖は神堯皇帝にして、姓は季名は淵なり、 等閑に虎を見又た猪に逢う、等閑に虎を見るとは寅なり、唐の高祖は丁亥の年に崩せり、猪に逢うとは亥なり、高祖は丁亥の年に崩せり、 小小の牛兒は角有り

と雖も、小小の牛兒とは高祖の武德四年九月の日前の道士にして、公名博奕なり、先に是れ黄巾にして其の習う所に究じ、遂に上表して仏法を滅ぼすとす。事に十有一條あり、大略して云く、祿終は國を損なり、家を破る、未だ世を感ず、聞かず、講つ、胡、佛、教は退けて去るに遺し、凡そ是れ沙門は放ちて桑梓に帰らしめ、も、則ち國家は昌泰にして、其の教行われんと、高祖は突の奏書を納れ、乃ち詔りて下して、諸沙門に問うて曰く、父母、師、親、を棄て、

君臣、花、服、を去るは、利は何の間に在る、益は何の情に在る、損益二言、講つ、妙、教、を動かせ、時に、法、師、なる有り、上表して五年を延ぶることを得たり、高祖崩じ、太宗の位に登りて、仏法を再興せり、具さに別伝の如し、半、教、と言つて正、に、打、撃、して、而も、害、す、こと、無、き、即、ち、是、なり、 清溪より竜出づれば惣べて須らく輸すべし。清溪は山の名なり、竜とは法法師なり、護法の竜能く博奕等山の邪見の徒をして翫て須らく伏せしめべきなり、

又た師に問う、此の後に於いて聖人の出づること有りや。師云く、林下に一人有るを見るに、当に道を得べし、亦た菩提に契わん。吾

が讖を聴け、曰く、震旦は闊しと雖も別路無し、震旦とは唐國なり、別路無しとは唯だ一心の法の有りなり、護大師の化導は是くの如きなり、 姪孫を仮らんと要して脚下に行く。姪孫とは今時の 金雞

は解く銜む一顆の米、金雞とは金州なり、護師は是れ金州の人なり、一顆の米とは意に道一を取る、江西の馬祖は名は道一なり、 供養す十方の羅漢僧、護和尚は付法して道一に与えたり、故に供養と言つ、十方とは馬和尙は是れ漢州十方、漢の羅漢寺に出家せるなり、

達摩大師同学の兄、仏大先と名づく。此の仏大先は是れ仏駄跋陀羅三蔵の弟子なり。仏駄跋多羅には復た弟子有り、那連耶舎と名

づく。南天に於いて大いに化し、後に此の土の東魏高勸の鄴都に來たりて、五戒優婆塞万天懿と梵本の尊勝經一部を訳出せり。万天



謔問う、彼天に菩薩有りて教を伝つるや。那連耶舍答えて曰く、西天の諸祖二十七師悉く此の法を説く。般若多羅と名づくるに亦た弟子有り、菩提達摩と名づく。此の土の後魏第八帝諱は詔の大和十年、洛陽に到り、少林寺に化道して九年に到りて示滅するまで一十五年を経たり。

又た問う、此の師後に人の能く継ぐ有りや。三蔵識して曰く、尊勝は今に古を感し、尊勝とは妙智なり古とは可大師は本と妙高の性有るも煩惱の尊を覆つて未だ現われず故に感ずと言つなり 肱無

く亦肱有り。肱とは手なり。可大師は法を求めて腕を断ちたるなり。 竜来たりて方に宝を受く、 竜来たるとは初祖西来するなり。方に宝を受くとは二祖の法を伝つるなり。 物を捧げて復た名を嫌う。捧ぐとは思ひなり。本と神光と名づけ復た蓮華に遇い之を嫌

いて名を改め言ひて恵可と爲せり。

又た問う、此の後誰か当た此れを継ぐや。三蔵識して曰く、初首は名を称せず、後簡聖王古師の歳一居士有り年歳を説かず姓名を称せず故に名を称せずと言つ 風狂にして又た声有り。

風狂とは二祖に風病有り、声有りとは遠近皆な病有ることを知る故に声有りと言つなり。 人は来たりて見るを喜まず、人は来たりて見るを喜まず、風を患うの形状を 白宝も初めは平平たり。白宝とは玉なり三祖は摩訶大師と名づく際の子なり三祖は摩訶大師と名づく

又た問う、此の祖の後に更に人の継ぐ有りや。又た識して曰く、起ちて自ら無碍を求め、一沙弥有り、年は十四にして道信と名づく、来たりて禮拜して問う、唯だ願わくは和尚某甲に解脫の法門を教えよと故に無碍を求むと言つ 路上に僧の礼するに逢い、路上には道なり。礼とは信有るなり。四祖大師は道信と名づく 脚下に六枝分かる。脚下とは門下なり。四祖下に

師は伝う我に繩没し、と。師とは三祖なり、我に繩没しとは疑に人の汝を縛する無ければ即ち是れ解脱なり。 尊号は諸量を過ぎ、量を過ぐとは弘の字なり。 嗔に逢つも憎を起さず。起さずとは忍の字なり。

又た問う、此の師の後更に人の継ぐ有りや。三蔵又た識して曰く、三四にして全く我無く、三四とは七なり。五祖は七歳にして道信大師に遇い、人我無くして出家したるなり。 水を隔てて

心灯を受く。水を隔ててとは五祖は新州前水都に於て四祖の心印を伝うることを得たり故に心灯を受くと言つ。 唯だ四句偈を書きて、唯だ四句偈を書きてとは神秀和尚も四句偈を呈し、惠能和尚も亦た四句偈を呈せり故に四句偈と言つ。 將て瑞田の人に対す。瑞田の人とは神秀和尚は南陽慧秀、瑞田の人なり。

又た問う、此の師の後、誰か能く之を継ぐ。三蔵又た識して曰く、物を捧げて何ぞ曾つて捧げん、捧ぐとは惠の字なり。 勲と言いて又た勲せず。勲とは能なり。六祖は能く名づく。

又た問う、此の師の後、其の法を明らむる者の能く之を継ぐや。三蔵又た識して曰く、心裏に能く事を感し、能く識すとは懐に能く識すとは懐に 漢江の

濱に説向す。説向とは説法なり。漢江の濱とは馬大師は漢州の人なり。馬大師は仏心印を求め、讓和尚は漢江に説向せるなり。 湖波に水月を探り、湖波とは曹溪なり。水月を探るとは得なり。讓大師は六祖の身辺に於て心印を伝ふることを得たり。 將て二三人を照らす。二三とは六に

三蔵又た識して曰く、領得す珍勤の語、領得とは馬大師は讓大師の如に於いて語を領せるなり。 郷を離れて日日に敷く。郷を離るとは南方なり。日とは鳥の字なり。敷くとは漬ぐるなり。馬大師は歸りて洪州に到り、南昌寺に大教を敷演せる是れなり。 梁に移

伝法の弟子六人なり。六人とは一には道一にして心を得たり。二には智達にして眼を得たり。三には常浩にして鼻を得たり。四には神照にして鼻を得たり。五には坦然にして耳を得たり。六には嚴訖にして舌を得たり。是れをば六人と爲すなり。

りて来たりて路に近づく、

梁に移るとは梁郡なり。路に近づくとは洪州の觀察使は姓は路達に大師に請て虔州南康縣に向わしめ移りて洪州開元寺に入らしむ故に來たりて路に近づくと言ふ。

余は算う脚天の徒。

余とは我の字なり。馬大師より二十年外にして、道に異いし者千万有り。遍く天下に行く故に脚天の徒と言ふ。

三蔵又た識して曰く、良地に玄旨を生じ、

良地とは東北なり。神秀和尚は五祖下より一技の法を伝へ、北に在りて自ら宗旨を立つることを為すなり。

通尊にして媚にして亦た尊なり。

通尊とは道号は大通禪師なり。媚とは秀なり。亦た尊とは三の

傳教する所なるが故に亦た尊なり。

比肩するもの三九族、

比肩とは同字なり。三九族とは十一人なり。秀和尚の足下より各あの宗旨を分ち南北異なること有り。

三蔵又た識して曰く、靈集天恩を媿じ、

靈とは神なり。集とは会なり。媿すとは尚なり。天恩とは神会大師の洛京の御承吉に住せり。

生互は二六人なり。

生互とは師資なり。二六とは石上とは秀大師の弟子、南宗の碑を磨如し、神秀の六代と為らんと欲するに、何ぞ其の縁教を連せしに縁り、此の時に當りて曹溪の宗旨は彼に於いて未だ盛行せず。故に意味無しと言つなり。

三蔵又た識して曰く、本と是れ大虫男にして、

印宗法師は本と是れ小乘にして、論へは大虫は是れ師子ならざるが如し。

迴りて師子の談を成す。

迴るとは伝つるなり。小を通らして大と作す。印宗法師は六祖を礼して便ち上乘を悟れり、是れ師子吼を成すなり。

官家は馬嶺に封じ、

封とは印なり。馬嶺とは宗なり。印宗は曾て講經の法師たるなり。

同に詳らかにするもの三十三あり。

同に詳らかにすることは同字なり。六祖の弟子は詳考等三十三人なり。禪師は峽山に住せり。

三蔵又た識して曰く、八女は人倫を出で、

八女とは安の字なり。人倫を出つとは國師なり。

八箇は婚姻を絶つ。

八箇とは安の字なり。婚姻を絶つとは安の徒は之を紹継することを為すこと難し。

三蔵又た識して曰く、走戊は朝隣に与し、

走戊とは越の字なり。忠國師は是れ越州の人なり。朝隣に与すとは國師と為るなり。

鵝鳥は子出身す。

鵝とは越州なり。今の越州是れ鵝鳥とは鵝鵝果なり。二天に感ずるとは、二天とは禪宗と代宗の二帝なり。感ずること有りとは帝は礼して師と為るなり。

三蔵又た識して曰く、小なりと説きて何ぞ曾つて小ならん、

希の字是

流ると言いて又た流れず。

遷の字是

草若し其の首を除かば、

露門を開き、能く首と為る者は当に菩提達摩なるべし、と。

草無し。三四の門を継ぎて修せん。ば、伝法の弟子の人数なり。其の伝法の人数に準らば、伝法に云うべし。十七の門を継ぎて修むと。

余の時那連耶舍は此の識を説き已つて、万天懿に告げて云く、今此の国に吾が滅後二百八十年中に、

大國王有り、善く三宝を敬ま

わん。此の前の諸賢、悉く世に出て、

群品を化導するもの約千百億有らん。後に得る所の法は只だ一師のみに因る。大饒益を興し、甘露門を開き、能く首と為る者は当に菩提達摩なるべし、と。

余の時菩提達摩和尚、海に浮かびて東來し、三載を経たり。

梁の普通八年丁未の歲九月二十一日、

広州に至りて上舶せり。

刺史蕭昂出でて迎え、梁帝に奏聞す。十月一日にして上元に到り、武帝親しく車輦を駕し、大師を迎請して昇殿せしめて供養す。是の時志公和尚、高座寺を監修す。彼は寺主の僧靈觀に謂いて曰く、汝の名は靈觀なり、実に靈觀なりや。靈觀曰く、唯だ願わくば和尚指示

公和尚、高座寺を監修す。彼は寺主の僧靈觀に謂いて曰く、汝の名は靈觀なり、実に靈觀なりや。靈觀曰く、唯だ願わくば和尚指示

せよ。志公曰く、西天より大乘の菩薩有りて此の国に入れり。汝若し信ぜずんば、吾が讒を聴け、曰く、仰ぎ観る両扇仰ぎ観るとは禪なり、両扇とは梁なり、

抵腰捻鉤抵腰捻とは十の字なり。鉤とは是なり。月の子なり。十月に到るなり。九鳥射尽くして、九鳥とは日なり。射尽くすとは二十九日して月の尽くるなり。唯だ一頭のみ有り。一頭とは十月の初一日にして幾て初祖の十月二日に到るを言つなり。至れば則ち久

しからず、梁国に在ること十九日にして便ち江に北に過ぐ故に久しからずと云つ。要らず刀を須いることを仮る。仁義を断つなり。竜に逢いて住まらず、初祖は武帝に見ゆ故に龍に逢つと云つ。祖師の嘗る所は帝の意に稱わず。便ち江を過ぐ故に住まらずと云つ。水を過ぎて則ち逃る。江を過ぎて魏に入る。介の時靈観則ち紙筆を以て録干記之。

・録干記之 干の字は或いは于かも知れないが、いずれにしろ良く読めない。而に改めるべきか。

介の時武帝問う、如何なるか是れ聖諦第一義。師曰く、廓然無聖。帝曰く、朕に対する者は誰ぞ。師曰く、識らず。又た問う、朕は九五に登りてより已来、人を度し寺を造り、写経し造像す、何の功德か有る。師曰く、無功德。帝曰く、何を以てか無功德なる。師曰く、此れは是れ人天の小果にして有漏の因、影の形に隨うが如く、善因有りと雖も、是れ実相なるには非ず。武帝問う、如何なるか是れ実功德。師曰く、淨智は妙円にして躰自ら空寂なり。是くの如きの功德は世を以て求めず。武帝は達摩の言う所を了せず、変容して言わす。達摩は其の年の十月十九日、自ら機の契わざるを知り、則ち潜かに江北に過ぎて魏邦に入れり。志公特に帝の所に至りて問うて曰く、我れ聞くならく、西天の僧至れり、と。今は何所に在りや。梁の武帝曰く、昨日、江を過ぎて魏に向うを送れり。志公云く、陛下は之を見て見ず、之に逢いて逢わす。梁の武帝問うて曰く、此は是れ何人ぞや。志公對えて曰く、此は是れ仏心印を伝うる觀音大士なり。武帝乃ち之を恨みて曰く、之を見て見ず、之に逢うて逢わす、と。即ち中使趙光を發して、彼に往きて之を取らしめんとせり。志公云く、但だ趙光一人のみに非ず、闔国取るも亦た廻らじ、と。

大師、東京に到りてより、一僧有り、神光と名づく。昔し洛中に在りて久しく莊老を伝え、年四十を逾えて大師に遇うことを得て、礼事して師と為し、従つて小林寺に至り、毎に師に問うも、師は並びに言説せず。又た自ら歎じて曰く、古人の求法は、骨を敲きて髓を取り、血を刺して像を画き、髪を布いて泥を掩い、崖に投じて虎を飼えり。古えすら尚お此くの如し、我れは何ぞ焉を惜しまん、と。時に大和十年十二月九日、求法の為の故に立ちて夜を終、雪乃ち腰に齊し。天明、師見て問うて曰く、汝は雪中に在りて立つ、如何なる求むる所有りや。神光は悲啼し泣涙して言く、唯だ願わくば和尚、甘露門を開きて広く群品を度せよ、と。師云く、諸仏の無

上菩提は遠劫に修行す。汝は小意を以て而も大法を求む、終に得ること能わじ、と。神光、是の語を聞き已つて則ち利刀を取りて自ら左臂を断ち、師の前に置けり。師は神光に語けて云く、諸仏菩薩の求法は、身を以て身と為さず、命を以て命と為さず。汝は断臂すると雖も、求法は亦た可なり、と。遂に神光を改めて、名づけて惠可と為せり。

・ 求法亦可在 句末の在は強い断定の語氣を表わす。

又た問う、請う和尚、安心せよ。師曰く、心を將ち来たれ、汝が与に安心せん。進んで曰く、心を見むるに了に不可得なり。師曰く、覓め得たるは豈に是れ汝が心ならんや。汝が与に安心し竟れり。達摩、惠可に語けて曰く、汝が為に安心し竟るに、汝は今見るや。惠可は言下に大悟せり。惠可、和尚に白すらく、今日乃ち知んぬ、一切諸法は本来空寂なることを。今日乃ち知んぬ、菩提は遠からざることを。是の故に、菩薩は動念せずして薩般若海に至り、動念せずして涅槃の岸に登る。師云く、是くの如し、是くの如し。惠可進んで曰く、和尚の此の法は文字記録有りや。達摩曰く、我が法は心を以て心に伝えて文字を立てず。

大師、諸人に語けて言く、三人の我が法を得たる有り。一人は我が髓を得、一人は我が骨を得、一人は我が肉を得たり。我が髓を得し者は惠可、我が骨を得し者は道育、我が肉を得し者は尼惣持なり。我が法は六代に至りて伝法の人を陵遅せん。惠可進んで曰く、何が故に第六代に、伝法の人を陵遅するや。達摩云く、邪法競い興りて正法を乱るが為なり。我れに一領の袈裟有り、伝授して汝に与う。惠可、和尚に白して曰く、法は既に心を以て心に伝えて復た文字無し。此の袈裟を用いて何をか為す。大師云く、内は法印を授けて以て證心に契わしめ、外は袈裟を伝えて以て宗旨を定めしむ。袈裟は法上に在らず、法も亦た袈裟に在らずと雖則も、中に於いて三世諸仏、遞いに相い授記せり。我れも今袈裟を以て亦た其の信を表わし、後代の伝法の者をして稟承有らしめん。学道の者、宗旨を知るを得て、衆生の疑いを断つが故に。惠可便ち頂礼し、親しく事つること九年、昼夜、左右を離れず。達摩大師乃而ち告げて曰く、如来は浄法眼並びに袈裟を以て大迦葉に付嘱せり。是くの如くして展転して乃ち我に至れり。我れ今、汝に付嘱す。汝は吾が偈を聴け、曰く、吾れ本と此の土に來たりて、教を伝えて迷情を救う。一花五葉に開き、結菓自然に成る。師は付法し已つて、又た惠可に告げて曰く、吾れ此の土に到りてより、六度、人の下業することを被むるも、我れ皆な拈じて出だせり。今の此の一度は更に

拈じて出ださず。吾れは已に人を得て付法したり。

余の時達摩、衆雲を領して、禹門の千聖寺に往き、止まりて三日を得たり。時に期城大守楊衍、師に問つて曰く、西国五天は師承して祖と為すに、未だ此の意を曉らず、其の義云何ん。師曰く、仏心宗を明らかにすばかりも差悞無く、行解相応する、之を名づけて祖と曰う。又た問つて曰く、唯だ此の一等のみなりや、更に別有りや。師答えて曰く、須らく他心を明らかにすば其の古今を知るべし。有無を黙わず、取するに非ざるが故に。賢ならず愚ならず、迷い無く悟り無し。若し是の解を能くせば亦た名づけて祖と為す。楊衍又た問つて曰く、弟子は久しく悪業に在りて、知識に近づきて勤めて恭敬を生ぜず、小智慧にして纏縛を生ずることを被り、却つて愚惑を成し、悟道を得ずして此に致れり。伏して願くば、師、大道を指示して仏心に通達せしめ、修行用心せしめよ。何をか法祖と名づくる。師は偈を以て答えて曰く、亦た悪を覩て嫌を生ぜず、亦た善を覩て措くに勤めず。亦た愚を捨てて賢に近づかず、亦た迷を抛ちて悟に就かず。大道に達して量を過ぎ、仏心に通じて度を出づ。凡聖と同一に躓まずして、超然たる之を名づけて祖と曰う。

楊衍作礼すらく、唯だ願わくば和尚久しく世間に住まりて、群品を化導せよ。師曰く、吾れ則ち去らん。宜しく久しく停まるべからず。人多く患いを致し、常に我を疾む。楊衍にして問う、是れ何人なりや、願くば師指示して当に之を知らしむることを為すべし。

師曰く、吾れは寧ろ往かん、終に焉を明らめじ。此の人を損わんことを恐る。汝若し委らんと要せば、吾が識を聴け曰く、江槎は玉浪を分かち、江とは流なり、槎とは支なり、玉浪とは三蔵なり、慧て流支三蔵を言うなり、管炬は金鏤管炬とは光なり、問とは統に管炬とは金鏤なり、鏤とは書業なり関す五口とは善の字なり、相い共に行くとはい言れ五口相五口とは善の字なり、相い共に行くとはい言れい共に行きと聖て仏法を行じ、法を嫉む心を生ぜり九九十とは此の我無きなり、彼我無十しとは此の我無きなりにし

て彼我無し。九十とは此の我無きなり、彼我無楊衍にして作礼して曰く、且らく尊長を辞す、願くば善く保護せよ。時に後魏第八主孝明帝大和十九年、涅槃に入れり。寿齡一百五十、熊耳の呉坂に葬在せり。武帝は昭明太子に勅して而して祭文を述べしめたり。

滅度の後三年、魏使に時に宋雲なる有り、西嶺に使と為りて却廻し、達摩の手に隻履を携さえたるに逢見せり。宋雲に語けて曰く、汝の国の天子已に崩ぜり、と。宋雲、魏に到るに果たして王已に崩じいたり。遂に後魏第九主孝荘帝に聞奏せり。乃ち塔を開くに、唯だ一隻履を見るのみ。却つて取りて少林寺に歸して供養せり。

武帝は自ら師の碑文を製せり。代宗皇帝、円覚大師と謚号し、空観の塔と勅せり。魏の丙辰の歳に遷化してより、今壬子の歳に迄

るまで四百一十三年を得たり。淨修禪師讀して曰く、菩提達摩、化道無為。九年の少室、六葉の宗師。熊耳に示滅し、隻履もて西歸す。梁天は薦せず、惠可は衣を伝う。

第二十九祖師慧可禪師なる者は是れ武卒の人なり。姬氏。父寂して初め其の子無し。共室念言すらく、我れ今善家に至りて而も慧子無く、深く自ら歎羨す、何の聖か加衛する、と。時に後魏第六主孝文帝永宜十五年正月一日にして、夜、光明を現じて一宅に遍ねし。茲れに因りて孕有りて子を産み、名づけて光光と曰う。年十五にして九經通誦す。年三十にして竜門香山寺に宝靜禪師に事え、常に定慧を修す。既に出家し已つて、東京の永和寺に至りて具戒せり。年三十二にして却つて香山に歩し、尊長に侍省す。又た八載を経て、忽ち夜靜に於いて一神人を見る。而して光に謂いて曰く、当に受果せんと欲すべきに、何ぞ此に於いて住まりて、南往してか而して道に近づかざるや、と。本と名づけて光光と曰うも、神の現わるるを見るに因るが故に号して神光と為せり。第二夜に至りて、忽然として頭痛して裂くるが如し。其の師、与に之に灸せんと欲す。空中に声有りて報らせて云く、且らく莫めよ、且らく莫めよ、此は是れ換骨にして非常に痛し、と。師は即便ち止めたり。遂に前事を説き、見神の由以て宝靜に白す。宝靜曰く、必ず是れ吉祥なり。汝の頂変ぜり。昔の首には非ず。五峯は玉軫を垂墜し、其の相異なれり、と。

遂に師を辞し、南行して達摩に遇うことを得て、豁として上乘を悟れり。師乃ち云く、一眞の法は尽く有す可し。汝は善く守護して断絶せしむること勿れ。汝は信衣を伝ふるに各おの表わす所有り。慧可曰く、何の表わす所か有る。達摩曰く、内は心印を伝えて以て證心に契わしめ、外は袈裟を受けて而して宗旨を定めしむ。錯謬せざるが故に。吾が滅度後二百年中、此の袈裟は伝えざるも、法は沙界に周ねからん。道を明らむる者は多く、道を行ずる者は少し。理を説く者は多く、理に通ずる者は少し。後に於いて得道するもの還た千万に近からん。汝の行ずる所の道に、末学を軽んずること勿れ。此の人志しを廻らせば便ち菩提を獲ん。初心の菩薩は仏と功等し。余の時可大師は付法を得已つて、広宣流布し、諸の有情を度せり。

天平年中に於いて、後周第二主考閔己卯の歳に一居士有り、年幾を説かず、口有十四。師を礼するに至るに及びて姓名を称せずし

て云く、弟子は身に風疾を患う、和尚、弟子の為に懺悔せよ。師云く、汝、罪を將ち来たれ、汝が為に懺悔せん。居士曰く、罪を覓むるに見る可からず。師云く、我れ今汝が為に懺悔し竟れり。汝は今宜しく仏法僧宝に依るべし。居士問う、但だ和尚を見れば則ち是れ僧なりと知るも、未審<sup>いぶか</sup>し、世間の何者か是れ仏なる、云何が法と為す。師云く、是れ心是れ仏、是れ心是れ法にして、法と仏とは無二なり。汝は之を知るか。居士曰く、今日始めて知んぬ、罪性は内外中間に在らざることを。其の心の然るが如く、法と仏とは無二なり。師は是れ法器なることを知り、而して与に剃髮して云く、汝は是れ僧宝なれば宜しく僧瓌と名づくべし。亦た具戒を受く。師告げて曰く、如来は大法眼を以て迦葉に付嘱し、是くの如く展転して乃ち我れに至れり。我れ今、此の法眼を以て汝に付嘱す、并せて袈裟を賜い以て法信と為す。汝は吾が偈を聴け、曰く、本来地有るに縁りて、地に困りて種花生ず。本来種有ること無くんば、花も亦た生ずる能わず。此の偈を説き已つて、瓌に告げて曰く、吾れ鄴都に往きて還償せん、と。

便ち彼所に去きて群生を化導し、三十四年を得たり。或いは城市に在りて隨処に縁に任せ、或いは人の使う所と為りて、事畢つて却還す。彼所の有智者毎に之に勧めて曰く、和尚は是れ高人なれば、他の使う所と為<sup>原作与</sup>ること莫れ、と。師云く、我れ自ら調心す、他の事に関わるに非ず、と。時に弁和法師なる有り、鄴都に於いて管し、城安鼎の匡救寺に涅槃經を講ぜり。是の時大師は彼の寺の門に至りて説法し、衆を集むること頗る多く、法師の講下には人少し。弁和は師を恠しみ、遂に県令瞿仲侃に往きて之に説くらく、彼の邪見の道人、講席を打破せり、と。瞿令は事由を委<sup>し</sup>らず、非理に損害して終らしめたり。磁州塗陽の東北七十余里に葬在せり。寿齡一百七歳なり。滅を示せし時(原作示于時滅)は、隋第一主文帝開皇十三年癸丑の歳に當れり。唐の内供奉沙門法琳、碑文を撰す。徳宗皇帝、大弘禪師大和の塔と謚号す。隋の癸丑の歳に遷化してより、今唐の保大十年壬子の歳に迄ぶまで三百五十九年を得たり。淨修禪師讚して曰く、二祖は碩学にして、操は堅確<sup>いすこ</sup>の如し。心は三乘を貫き、頂は五岳よりも奇なり。天上の麒麟、人間の鸞鷲。断臂して雪に立ち、混じりて而も濁(原作獨)らず。

第三十祖僧瓌なる者は即ち是れ大隋の三祖なり。何許<sup>いすこ</sup>の人なるかを知らず、姓字を得ず。可大師に遇つて心法を付するを得、大い

に群品を集めて普く正法を雨ふらせり。会中に一沙弥有り、年始めて十四、名は道信にして来たりて師を礼し、而して師に問うて曰く、如何なるか是れ仏心。師答えて曰く、汝は今是れ什摩心なりや。对えて曰く、我れは今無心なり。師曰く、汝既に無心なれば仏に豈に心有らんや。又た問う、唯だ願わくば和尚、某甲に解脱の法門を教えよ。師云く、誰人か汝を縛せる。对えて曰く、人の縛する無し。師云く、既に人の縛する無くんば汝は即ち是れ解脱せり。何ぞ更に解脱を求むることを須いん。道心言下に大悟し、師の左右に在ること八九年間、後に吉州に於いて具戒し、却歸して師に省觀す。師は命じて付法し、而して偈を説きて曰く、花種は地に因ると雖も、地より種花生ず。若し人の種を下す無くんば、花種は尽く生ずること無からん。

師の隨第二主煬帝大業二年丙寅の歳に遷化してより、今唐の保大十年壬子の歳に迄ぶまで三百四十年を得たり。大明孝皇帝、智鏡禪師覺寂の塔と謚号せり。淨修禪師讚して曰く、三祖大師、法王の眞子。語は幽微に出で、心に彼此無し。或いは山林に処り、或いは廓市に居る。地に因りて花生じ、栴檀旃旒す。

第三十一祖道信和尚なる者は、即ち唐土の四祖なり。姓は司馬氏にして、本と河内に居り、邁きて蘄州に止まり、広濟の所に育てり。璨大師の心印を得し後、忽ち黄梅の路上に於いて、一小児を見るに、年は七歳にして出だす所の言は異なり。師乃ち子に問う、何姓なりや。子答えて曰く、姓は常の姓には非ず。師曰く、是れ何姓なりや。子答う、是れ仏性なり。師曰く、汝に姓勿きや。子答えて曰く、其の姓は空なるが故に。師、左右に謂いて曰く、此の子は非凡なり、吾が滅度二十年中、大いに仏事を作さん。子問うて曰く、諸聖は何よりして證せるや。師云く、廓然、廓然。子曰く、与摩ならば則ち無聖にし去るなり。師曰く、猶お這個の紋綵の在る有り。師乃ち付法の偈に曰く、花種に生性有りて、地に因りて花性は生ず。大縁の性と合すれば、生ずるに当りて不生の生なり。

師の付法し已りし時は、高宗永徽二年庚戌の歳に当れり。閏九月四日、掩然として滅せり。寿年七十二なり。葬後二年の四月八日、塔門故無くして自ら開くに、容貞端然として常日に異なる無し。茲れより已後、門人更に取閉せず。大歴年中に至りて、代宗、大医禪師慈雲の塔と謚号せり。中書令太子賓客襄陽公杜正倫、碑文を撰せり。淨修禪師讚して曰く、四祖は十四にして、師に因りて解脱



せり。世の道流に処りて、慈を興すこと量闊し。永く彫榮を絶ち、迥かに始末を祛る。菓は少くして花は多し、忍のみ衣鉢を伝つ。

第三十二祖弘忍和尚、即ち唐土の五祖なり。姓は周氏、本と汝南に居り、遷りて蘄州黄梅に止まる。誕生して七歳、出家して信大師に事えたり。幼くして聡敏、事は再問せず。母懐するの時、光りを発すること通霄、毎に異香を聞き、身体安泰なり。後乃ち生育し、形貞端嚴なり。哲者の之を觀て云く、此の子は七種の大人の相を闕きて、仏に及ばざるなり、と。

時に盧行者有り、年は三十二、嶺南より来たりて大師に礼覲す。大師問つ、汝は何方よりして来たりて、何の求むる所有るや。對えて曰く、新州より来たり、来たりて作仏せんことを求む。師云く、汝は嶺南の人にして仏性無きなり。行者云く、人には則ち南北有るも、仏性には南北無し。師云く、汝は何の功德をか作す。行者對えて云く、願わくば力を竭くして石を抱きて米を舂き、師僧に供養せん。師便ち之を許せり。一日一夜に十二石の米を舂き得たり。首末親しく事え、八箇余月を経たり。行者又た問うて曰く、如何なるか是れ大道の源。師曰く、汝は是れ俗人なり、我れに此の事を問うて什摩をか作す。對えて曰く、世諦には即ち僧俗有るも、道豈に人を碍えんや。師曰く、汝若し是くの如くんば、人に従つて覓むること莫れ。進んで曰く、与摩ならば即ち外より得ず。師曰く、内も亦た非なり。

大師、遷化に臨みし時、衆に告げて云く、正法は聞くこと難く、盛会は逢ふこと希なり。是れ你諸人、如許多の時我が身邊に在り。若し見処有らば各おの所見を呈せよ。吾が語を記すること莫れ。我れ你が与に證明せん。時に衆中に神秀有り、師の頻りに訓告するを聞き、遂に壁に揮毫して偈を書きて曰く、身は是れ菩提の樹、心は明鏡の台の如し。時時に勤めて扞拭し、塵埃有らしむること莫れ。師は此の偈を見て乃ち衆に告げて曰く、是れ你諸人、若し此の偈に依りて修行せば、而ち解脱を得ん、と。衆僧惣べて此の偈を念ぜり。一童子有り、碓坊裏に此の偈を念ず。行者曰く、什摩をか念ず。童子曰く、行者未だ知らずや、第一座、偈を造りて師に呈せるに、大師曰く、若し此の偈に依りて修行せば、而ち解脱を得ん、と。行者曰く、某甲は文字を識らず、請つ兄、吾が与に念じ看よ。我れ聞きて仏会に生れんことを願わん。一の江州別駕張日用なる有り、行者の為に高声に偈を誦せり。行者却つて張日用に請

うらく、我が与に偈を書け、某甲に一個の拙見有り、と。其の張日用、他の為に偈を書きて曰く、身は菩提の樹に非ず、心鏡も亦た台に非ず。本来無一物、何れの処にか塵埃有らん。時に大師は復た往きて之を觀、揮却し了りて拳顔微笑せり。讚賞せざると亦も、心に自ら詮勝せり。師は又た碓坊に去き、便ち行者に問う、不易、行者、米は還た熟せるや。對えて曰く、米熟すること久し。只だ是れ未だ人の簸る有らず。師云く、三更に則ち至れ。行者便ち喏と唱う。三更に至りて行者は大師の処に來たれり。大師は他の与に名を改め、号して慧能と為せり。當時に便ち袈裟を伝え、以て法信と為せり。釈迦牟尼の弥勒の記を授くるが如し。大師便ち偈ありて曰く、有情來たりて種を下し、地に因りて果還た生ず。無情は既に種無し、性も無く亦た生ずることも無し。行者は偈を聞きて歡喜し、教を受けて奉行せり。

師は又た告げて云く、吾れは三年にして方に滅度せん。汝は且らく行化すること莫れ。當に汝を損つべし。行者云く、は當た何処に往きて而して避難するに堪つるや。師云く、懷に会えば則ち止まり、会に遇えば且らく蔵れよ。懷は則ち巢

又た問う、此の衣伝つるや。師云く、後代の人の得道の者は恒河沙のごとし。今此の信衣は汝に至れば則ち住む。何を以ての故ぞ。達摩大師、此の衣を付囑せしは、人の信ぜざるを恐れて表聞せるのみ。法豈に衣に在らんや。若し此の衣を伝えなば、恐らくは物を損せん。此の衣を受くる者は命、懸糸の如し。況んや達摩云く、一花五葉に開き、結菓自然に成る、と。是れ此の土の汝と五人を印せるなり。般若多羅云く、菓満ちて菩提円か、花開きて世界起る、と。此の両句も亦た今時法衣の汝に至るを印せり。合に人に付与すべからず。行者は教を奉じて便ち大師を辞せり。大師は遂に江辺に到り、小船子に昇れり。師自ら櫓を把るに、行者曰く、ム甲櫓を把らん。師云く、你是鬧ぐこと莫れ。我れ若し称断せば、是れ你、我に囑す。你若し称断せば、我れ則ち你に囑す。江を過ぎつて行者に向つて云く、你好く去れ。其の行者進遷して南方に趣(原作取)向せり。

師は三日を経て都べて説法せず。第四日に至りて衆人問うて曰く、師の法は何人か嗣ぐ。師云く、吾が法は已に嶺南に往けり。神秀便ち問う、何人か之を得たる。師云く、能なる者則ち得たり。衆人良久思惟すらく、行者を見ざること数日なれば、恐らくは是れ法を將ち去りたるなり、と。當時、七百余人一齊に盧行者を趁えり。衆中に一僧有り、号して慧明と為す。大庾嶺上に趁い得て衣鉢

を見るも行者を見ず。其の上坐便ち近前し、手を以て之を提するも衣鉢は動かず。便ち自力の薄きを委り得て則ち山に入りて行者を  
覓め、高処より行者の石上に在りて坐せるを望見せり。行者は遙かに明上座を見て、便ち来たりて我が衣鉢を奪わんとせるを知り、則  
ち云く、和尚、衣鉢を分付せり。某甲は苦ろに辞して受けざるも、再三伝持せんことを請いたれば受けざる可からず。将ち来たと  
雖も現に嶺頭に在り。上座若し要せば、便ち請う、将ち去れ。明上座云く、衣鉢の為ならず、特に仏法の為に来たれり。知らず、行  
者の五祖を辞せし時、何の密語密意か有りし。願わくば我が為に説け。行者は上座の心意苦ろに切なるを見て便ち他に向つて説けり、  
静思静慮して、善をも思はず、悪をも思はず、正に与摩に思の生ぜざる時、我に本来の明上座の面目を還し来たれ。上座又た問う、上  
来の密語密意は只だ這个のみ有りしか、為当更に意旨有りしか。行者云く、我れ今明明に汝の与に説きたれば則ち是れ密ならず。汝  
若し自ら自己の面目を得たらば、密は却つて汝に在り。上座問う、行者は黄梅和尚の処に在り、意旨如何ん。行者曰く、和尚は我の  
秀上座に對せし偈を看て則ち我が入門の意を知り、則ち惠能に印すらく、秀は門外に在り。汝は入門するを得て得坐被衣せり。向後  
自ら看よ。此の衣鉢は従上来分付す。切に須らく人を得べし。我れは今汝に分付す。汝は須らく努力して将ち去るべし。十有余年、吾  
が教を弘むること勿れ、当に難の起ること有るべし。此れを過ぎてより已後、善く迷人を誘え、と。又た問えり、当た何処にか往き  
て而して避難するに堪えん、と。師云く、懐に逢えば則ち止まれ、会に遇えば且らく蔵れよ、と。慧明云く、某甲は黄梅に在りて剃  
髪せりと雖も、実に宗乗の面目を得ざりき。今、行者の指授を蒙り、也た入処有り、人の水を飲みて冷暖自知するが如し。今より向  
後、行者は即ち是れ慧明の師なり。今便ち名を改めて号して道明と為さん。行者便ち云く、汝若し是くの如くんば、我も亦た是くの  
如し。汝と同一に黄梅に在るに異ならず。自ら當に護持すべし。道明云く、行者好与、速やかに嶺南に向え。在後に大いに僧有りて来  
たりて行者を趁う。道明又た問う、宜しく何処に往くべきや。行者云く、蒙に遇えば則ち住まれ、袁に逢えば即ち止まれ。道明は敬  
仰の心もて行者を辞し、便ち廻りて北に向つて去れり。虔州に至りて果然して五十余僧の来たりて盧行者を尋ぬるを見たり。道明、衆  
に向つて云く、大庾嶺頭の懐化鎮に五六日尋候し、兼ねて諸門津並びに北に向つて行者を尋見せしものに問うに、此の色を見ずと言  
えり、と。諸人は却廻し、道明は独り廬山の布水台に往き、三年を経し後、蒙山に歸りて修行せり。凡そ徒弟は尽く嶺南の六祖の処

に過ぎしめたり。只今、蒙山の靈塔現在す。

大師は付法せし後、高宗在位二十四年壬申の歳二月十六日に滅度せり。春秋七十四なり。代宗、大満禪師法雨の塔と謚号せり。上元壬申の歳に遷化してより、今唐の保大十年壬子の歳に迄ぶまで二百八十年を得たり。浄修禪師讚して曰く、五祖は七歳にして、言前に洞達す。石牛霧を吐き、木馬煙を含む。身心恒に寂し、理事俱に玄なり。無情に種無し、千年万年。

第三十三祖惠能和尚、即ち唐土の六祖なり。俗姓は盧、新州の人なり。父の名は行瑠、本貫は汜陽にして移りて新州に居る。父は早く亡くなり、母親は孤に在りて貧乏に艱辛せり。能は市に柴を賣(原作買)りて供給せり。偶ま一日柴を賣(原作買)る次いで、客有り姓は安にして名は道誠、能の柴を買(原作賣)わんと欲す。其の價相い当り、送り將ちて店に至る。道誠は他の柴價の錢を与え、惠能は錢を得、却つて門前に出づるに忽ち道誠の金剛經を念ずるを聞けり。惠能亦たび聞くや心開けて便ち悟れり。惠能遂に問う、郎官、此は是れ何經なりや。道誠云く、此は是れ金剛經なり。惠能云く、何よりして来たりて此の經典を読むや。道誠云く、我れは蘄州黄梅県の東馮母山に於いて、第五祖弘忍大師を礼拜せり。今現に彼の山に在りて説法す。門人一千余衆あり。我れは此処に於いて聽受せり。大師は道俗に勧むらく、此の經を受持せば即ち見性することを得て、直に成仏することを了せん、と。惠能聞説きて宿業に縁有り。其の時道誠は惠能に勧めて黄梅山に往き、五祖に礼拜せしめんとす。惠能報らせて云く、老母有り、家乏しくして欠闕するに縁りて、何ぞ母を抛ちて人の供給するもの無からしめん。其の道誠遂に惠能に銀一百兩を与え、以て老母の衣糧に充てしめ、便ち惠能をして往き去きて五祖大師を礼拜せしめたり。惠能は其の銀を領得して分付し、老母を安排し訖つて、一月余日を經ずして則ち黄梅県の東馮母山に到り、五祖を礼拜せり。

五祖問う、汝は何方よりして来たり、何の求むる所有りや。惠能云く、新州より来たり、来たりて作仏せんことを求む。師云く、汝は嶺南の人にして仏性無きなり。對えて云く、人は即ち南北有るも、仏性は即ち南北無し。師曰く、新州は乃ち獵獠なれば寧んぞ仏性有らん。對えて曰く、如来蔵性は虻蟻にも遍し、豈に独り獯獠に於いてして無からんや。師云く、汝は既に仏性有れば何ぞ我が意

旨を求めん。深く其の言を奇として復た更に問わず。これより之が心印を得たり。既に衣法を承けて、遂に慈容を辞せり。

後、四会、懷集の間に隠ること首尾四年なり。儀鳳元年正月八日に至り、南海県の制旨寺にて印宗に遇えり。印宗、寺を出でて迎接し、寺裏に歸りて安下せり。印宗は是れ経論を講ずる僧なり。一日有りて正に経を講ずるに、風雨猛く動けり。其の幡の動くを見て、法師は衆に問えり、風の動くや、幡の動くや、と。一个是風動くと言ひ、一个是幡動くと言ひ、各自に相い争ひ、講主に就いて證明せしめんとす。講主は断じ得ずして却つて行者に断ぜんことを請えり。行者云く、是れ風の動くならず、是れ幡の動くならず。講主云く、是れ什摩物が動ける。行者云く、仁者の自心動くなり。此れより印宗、席座の位を廻らせり。正月十五日に剃頭し、二月八日に、法性寺に於いて智光律師に請つて受戒せしむ。戒壇は是れ宋朝求那跋摩三蔵の置く所なり。嘗つて云く、後に肉身の菩薩有りて此に於いて受戒せん、と。梁末に眞諦三蔵有り、壇邊に於いて菩提樹を種えて云く、一百二十年にして肉身の菩薩有り、此の樹下に於いて説法せん、と。師は果然して此の樹下に於いて無上乘を演べたり。明年の二月三日に至りて便ち辞して、曹溪宝林寺に去き、説法化道して無量の衆を度せり。師は一味の法を以て雨ふらせ、普く学徒を潤おせり。信衣は伝えず、心珠は洞く付したり。得道の者は恒河沙の若く、諸方に遍満し、落落として星布せり。

時に神竜元年正月十五日、則天孝和皇帝、大師に詔して云く、朕は虔誠に道を慕い禪門を渴仰す。諸山の禪師に詔して内道場に集まらしむるに、安秀の二徳最も僧首と為す。朕、諮りて法を求むる毎に、再三辞推して云く、南方に能和尚有り、忍大師の記を受け、達摩の衣を伝えて信と為し、上乘を頓悟し仏性を明見せり。今、韶州曹溪山に居りて、衆生に即心是仏を示悟す、と。朕聞く、如来は心の法を以て摩訶迦葉に付嘱し、是くの如く相伝し、達摩に至りて教は東土に被し、代代相承して今に至るまで絶えず、と。師は既に稟受し并せて信衣有れば、京師に赴きて化を設く可し。緇俗帰依し、天人瞻仰せん。故に中使薛簡を發遣して師を迎えしむ。願わくば早く降り至れ。大師表して曰く、沙門惠能、生るるに辺方よりし、長じて道を慕い、叨に忍大師の如来の心印を付するを承け、西国の衣鉢を伝えて東山の仏心を受けたり。伏して奉ず、天恩、中使薛簡を發して惠能に詔りして入内せしむるを。惠能は久しく山林に処り、年邁きて風疾あり。陛下、徳は物外を包み、道は万邦を貫き、蒼生を育養し、黎庶を仁慈し、恩旨天に弥り、釈門を欽仰

す。惠能の山に居りて疾を養い、道業を修持し、上は皇恩及び諸王太子に答つることを恕せ。謹んで表を奉り、陳謝して以て聞ず。釈沙門惠能、頓首頓首、謹んで言つ。

時に中使薛簡、師に啓して云く、京城の禪師大徳は、人に教つらく、要らず坐禅を仮りて然して方めて得道す、と。師云く、心により道を悟る、豈に坐に在らんや。故に經に云く、若し人有つて言わん、如来は若しくは来たり若しくは去り、若しくは坐し若しくは臥すと、是の人は邪道を行じ、我が説く所の義を解せず。如来なる者は從來する所無く、亦た去る所無し、故に如来と名づく、と。諸法は空なるが故に即ち是れ如来は畢竟無得無證なり、豈に況んや坐をや。薛簡曰く、弟子天庭に至らば、聖人必ず問わん。伏して願わくば和尚、心要を指授(原作受)せよ。伝えて聖人及び京城の学道の者に奏せん。譬えば一灯の百千灯を照らして、冥き者は皆な明らかならしめ、明明無尽ならしむるが如くせん。師云く、道には明暗無し、明闇は是れ代謝の義のみ。明明無尽も亦た是れ尽くること有り、相い待ちて名を立つればなり。故に經云く、法に比有ること無し、相い待つこと無きが故に、と。薛簡曰く、明は智慧に譬え、闇は煩惱に喩ふ。学道の人若し智慧を用て生死煩惱を照らさざれば、何ぞ出離することを得ん。師云く、煩惱即ち是れ菩提なり、無二無別なるが故に。智慧を以て煩惱を照らす者は是れ二乗人の見解にして、有智の人は終に此くの如くせず。薛簡曰く、何者か是れ大乘人の見解なる。師云く、涅槃經に云く、明と無明とは、凡夫は二と見るも、智者は其の性の無別なるに達す。無別の性即ち是れ実性なり、と。凡に処りても滅らず、聖に在りても増さず、煩惱に住して而も乱れず、禅定に居して而も寂せず、不断不常、不来不去、中間及び其の内外に在らず、不生不滅にして性相常住、恒にして変ぜざる、之を名づけて道と曰う。簡曰く、師も也た不生不滅と説く、何ぞ外道の不生不滅と説くに異ならん。師云く、外道の説く不生不滅は、生を將て止滅すれば滅は猶お滅せず。我が説く不生不滅は、本自より生ずること無く、今も亦た滅すること無し。所以に外道に同じからず。中使、心要を得んと欲せば、一切善惡都べて思量すること莫れ、自然に得入して、心躰は湛然常寂にして妙用恒沙ならん。時に薛簡、師の所説を聞きて豁然として便ち悟り、師を礼すること数拜して曰く、弟子今日始めて知んぬ、仏性は本自より之有りと。昔日は將謂えり、太だ遠しと。今日始めて知んぬ、至道は遙かならず、之を行ずれば即ち是なりと。今日始めて知んぬ、涅槃は遠からず、触目菩提なりと。今日始めて知ん

ぬ、仏性は善悪を念ぜず、無思無慮、無造無作、無住無為なりと。今日始めて知んぬ、仏性は常にして変易せず、諸境の遷す所を被らずと。中使、大師を礼辞し、遂に表を持って京に至れり。時に神竜元年五月八日に当れり。

後に九月三日に至りて、詔を廻らして曰く、師は老病を辞し、朕が為に修道す、国の福田なり。師は浄名の若く疾に託し、金粟のごとく大教を闡弘す。諸仏心を伝え、不二の法を談じて口を毗耶に杜じ、声聞は呵することを被り、菩薩は辞退せり。師は若く此くの如し。薛簡は師の指教を伝え、如来の知見を受くらく、一切善悪すべて思惟すること莫くんば、自然に得入し、心跡は湛然常寂にして妙用恒沙ならん、と。朕は積善の余慶あり、宿に福因を種えて、師の出世に値い、上乘の仏心第一を頓悟せり。朕は師恩に感荷し、頂戴して修行し、永永に不朽ならん。磨納の袈裟一領と金鉢一口とを奉り、大師に供養す。其の後勅下りて、寺額重興寺を賜い、及び新州の古宅に国恩寺を造れり。

師は毎に諸善知識に告げて曰く、汝等諸人、自心是れ仏なり、更に孤疑すること莫れ。外に一物無くして而も能く建立するは、皆な是れ本心の万種の法を生ずるなり。故に經に云く、心生ずれば即ち種種法生じ、心滅すれば即ち種種法滅す、と。汝等須らく一相三昧、一行三昧に達すべし。一相三昧なる者は、一切処に於いて相に住せず、彼の相中に於いて憎愛を生せず、取せず捨せず、利益を念ぜず、散壞を念ぜず、自然に安樂なるなり。故に此れに因りて名づけて一相三昧と為す。一行三昧なる者は、一切処に於いて、行住坐臥、皆な一直心にして即ち是れ道場、即ち是れ浄土なるなり。此れを之れ名づけて一行三昧と為す。地に種有るは能く含蔵するが故なるが如く、心相三昧も亦復是くの如し。我れ説法する時は猶お普く雨ふらすが如し。汝に仏性有るは地中の種の如し。若し法雨に遇わば各おの滋長することを得ん。吾が語を取る者は決して菩提を證せん。吾が行に依る者は定めて聖果を證せん。吾れ今、此の衣を伝えざる者は、衆の信心をして疑惑せざらしめんが為を以てなり。普く心要を付して各おの所化に随わしむ。昔し吾が言つ有り、吾れより後に若し此の衣を受くれば、命は懸系の如からん、と。吾れは道化を以て汝を損つ可からず。汝は吾が法を受く、吾が偈を聴け、曰く、心地は諸の種を含み、普ねく雨ふれば悉く皆な生ず。頓悟して花情已り、菩提の果自ら成る。師は此偈を説き已つ

て、乃ち衆に告げて曰く、其の性は無二、其の心も亦た然り。其の道は清浄にして、亦た諸相無し。汝は觀淨すること及び其の心を空すること莫れ。此の心は本浄にして、亦た取る可き無し。汝各おの努力せよ、隨縁して好く去れ、と。

人有りて問うて曰く、黄梅の意旨は何人か得たる。師云く、仏法を会する者得たり。僧曰く、和尚は還た得たるや。師云く、我は得ず。僧曰く、和尚は什摩と為てか得ざる。師云く、我れ仏法を会せざればなり。雲大師拈じて竜化に問う、仏法に何の過有りて、祖師肯えて会せざるや。花云く、向上人の分上は合はた作摩生。進んで曰く、向上人の事如何ん。花云く、天は反り地は覆える。竜花却つて雲大師に問えり。大師云く、一翳除かざれば出身するに路無し。進んで曰く、一翳を除き得る底の人、還た向上人と稱し得るや。雲大師云く、横眠直臥するに何の妨げか有らん。

六祖、僧を見、弘子を豎起して云く、還た見るや。对えて云く、見る。祖師、背後に抛向して云く、見るや。对えて云く、見る。師云く、身前に見るや、身後に見るや。对えて云く、見る時は前後を説かず。師云く、是くの如し、是くの如し。此は是れ妙空三昧なり。人有つて拈じて招慶に問う、曹溪、弘子を豎起す、意旨如何ん。慶云く、忽ち人有つて杓柄を迴らして汝に到らば作摩生。学人耳を掩いて云く、和尚。慶便ち之を打つ。

余の時大師、世に住して説法すること四十年なり。先天元年七月六日、忽然として弟子に命じて、新州の故宅に於いて塔一所を建てしむ。二年七月一日、諸の門人に別る、吾は当に途に進み、新州に歸るべし、と。大衆緇俗は啼泣して大師を留連せり。大師は納れずして曰く、諸仏すら出世して般涅槃を現じ、尚お其の宿命に違つこと能わず。況んや吾れは未だ分段の報を變易すること能わず。必然の至り、当に所在有るべきのみ、と。門人師に問う、師は新州に歸り、早晚いっせう却迴するや。師云く、葉は落ちて根に歸る。來たる時は口無けん。問う、其の法は誰に付するや。師云く、有道の者の得、無心の者の得。又曰く、吾が滅度の後七十年末に、二菩薩有り、東よりして來たらん。一は在家の菩薩にして、同に出でて化を興し、我が伽藍を重修し、我が宗旨を再建せん。師は言い訖つて



新州国恩寺に往き、飯食し訖つて敷坐被衣するや、俄然として異香室に満ち、白虹地に属し、奄として八月三日に遷化せり。春秋七十六なり。先天二年に当り、達摩大師の伝えし袈裟一領、是れ七条の屈胸布にして青黒色なるに碧絹もて裏を為せる、并せて鉢一口……。中宗、大鑑禪師元和靈照の塔と勅謚せり。

癸丑の歳に遷化してより、今唐の保大十年壬子の歳に迄ぶまで二百三十九年を得たり。浄修禪師讚して曰く、師は黄梅に造りて、旨を得て南来す。爰原作奚に幡の義に因りて、大いに法雷を震わせたり。道明は遭遇し、神秀は遅迴せり。衣は付せざると雖も、天下に花開く。

## 祖堂集卷第二

